

## 不安全の中の安心

荒谷 卓

### 砂漠のダチョウ

「安全と安心」という言葉を最近よく耳にする。使われ方は様々であるが、あたかもひとつの単語のように扱われていることも多い。自分が置かれた状態を「安全」と認識すれば「安心」するのは当然であるが、同じ状態でも「不安全」と捉えれば「不安」になるのもまた当然である。つまりある状態において、「安心」するのか「不安」と思うのかは、個人の情報量やものの見方、感性の違い等によって変わってくるのだ。

ところで、本当か嘘かはわからないが、『ダチョウは、危険が切迫したとき、砂に頭を突っ込んで危険を見ないようにする』という。これは「不安全」な実態から目をそむけ「安心」を欲する象徴的例え話である。今の日本人の多くは、この例え話でいうところの『ダチョウ化』しているのではないだろうか。言い換えれば、不安全なものを不安全と認める勇気が失われているのではないか。身近な問題としては、現実には犯罪の危険があるのに「犯罪はあってはならない」と、危険の存在を回避してしまっただけでは対策も出てこない。国際関係では、憲法の前文に記された「平和を愛する諸国民の公正と信義」に期待するあまり、国際社会に「悪意」などあるはずはないと信じてしまえば、毅然とした政治的対応は必要としなくなる。「危険と悪意の存在を認めると、対決を余儀なくされるので不安だ」というなら、まさに『ダチョウ化』である。日本人が、もはや地域社会や国際社会の不安全な現実に立ち向かう気概を失っているとすれば、危惧すべきことである。

「不安全な状態に直面したとき、一体自分は何をなすうるか」を見出したくて、今から25年前、私は至誠館に通いだした。職業も自衛官を選んだ。国が危機に直面したとき、自分が何かをしなくてはいけないと考えたからだ。自衛官になった以上、もっとも激烈な殺し合いとなる戦闘の場において、「如何に不安を克服し、正しいと信ずることを実行できるか」、責任ある答えが必要である。特に現在は、死の危険がある行動を部下に命ずる部隊指揮官という職にあるので、自分だけでなく部下の生死に関しても、その責任を深く自覚しなくてはならない。今の私にとっての武道は、自分の生き方そのものになったといえる。

このように、現実の問題に直面している私が、未熟ながらも現実と照らし合わせつつ理解してきた武道について、技等の体の使い方を「武術」、心の持ち方を「武士道」として整理してみたいと思う。

「技の形」は、本質の入った「プレゼント箱」

まず、武術において「正しいこと」とは、身についた『感覚』で「形」ではないということである。技の初学は形から入らざるを得ないが、その形をいっぱい積み木のように積み上げて実際の戦いでは使い物にならない。道場で習った「形」は、実際の場面では状況に応じて変化させなくてはいけない。だから、最初に教わる技の形は、「本質」が入っているプレゼント箱のようなものと考えたらいいかもしれない。大事なものは箱ではなく、中に入っている「本質」である。箱は形が決まっているのでそれ以上変化できないが、「本質」は形がないからいくらでも変化できる。

自衛隊の訓練でも、武器の知識が十分身につき射撃や爆破が上手くなっても、作戦行動は出来ない。自由意志を持つ相手と対する戦闘において、形をコピーした技術やマニュアルどおりの知識では、状況に適應しないばかりか、相手に見透かされてしまうからだ。これは、知識が満載された分厚い辞書が、それ自体は重しか踏み台にしか使えないようなものだ。『感覚』として身についたものが、実際に相手と対したときに現れる「形」が技である。「技の形」はその条件下での一過性のものでしかないが、『感覚』は普遍のものである。武術の実力とは、この『感覚』を身につけ使いこなせるということなのだろう。

#### 感性を磨くには

では、これを武士道に置き換えてみよう。武道における「心の持ち方」とは、「それが正しいと教わったからそうするべきだ」というような、与えられた価値観に依存するようなものではない。自分の真心に問いただした結果、「正しい」と信ずるから、あえて戦いも辞さないという自立した自由な価値観に基づくものである。では、何を持って「正しい」とするか。

私が思うには、文字にされた「正しさ」は技で言うところの箱であって、本当の正しさはその中にどれだけ大事な「本質」が詰まっているかだと思う。聖書、コーラン、経典に記された文字に拘ると争いが絶えない。文字を神聖化するのではなく、文字に込められた「本質」にこそ着目すべきである。同じように、成文化された法は、社会秩序を維持する上で正しさの根拠ではあるが、善意にも悪意にも利用できる箱にすぎず、法の理念たる条理が「本質」にあたる。科学的知識は、自然界に存在している「本質」を感じ取ることが出来ない人でも、それを文字で理解しやすいようにするための箱の断片である。

このような「正しさ」の「本質」を感じとる力が『感性』である。『感性』が磨かれていれば、知識が創造的に活用され、状況を正しく把握し、適切な判断や決断が可能となる。逆に、『感性』が乏しければ、いくら知識をたたき込んでも頭が辞書になるだけでバランスを失い、状況にそぐわない受け売りの正しさを繰り返すだけになる。

『感性』を磨くためには、既製品の「正しさ」を暗記する単純作業はやめて、ものごとの「本質」を考え、感じ取る癖をつけることが肝要である。例えば、道場では、たまに見取り稽古をするのがいい。見取り稽古は「技の型」に含まれた「理」を考えて見出す『感性』の稽古に役立つ。磨かれた『感性』さえ身につければ、現実の問題に対応し自分の信ずる「正義」

が形となって現れる。

### 実戦で生かせる鍛練とは

さて次に、実力が身につき、知力を養ったとしても、実際の場面で本当にそれを使えるかという問題に直面する。稽古ではうまく使えた技が、試合では使えなかったということがよくある。うまくいかない原因は、多くの場合「心」の問題である。特に、戦いの場ともなると恐怖で心の安定を失う。

試合や闘争だけが戦いの場というわけではない。日々の人間関係においても、自分が「正しい」と信ずることを通すか、あるいは、仕事上の立場、利益、安全等を優先させるかといった選択の場面が、戦いの場にあたる。そのような状況で、「正しいこと」を正しいと言えないのは、技が身につけているのに、実戦でそれを使えないのと同じである。立場や利益を失うこと、不安全な境遇に至ることを恐れて自己の「正義」に反し、「安心」を得ようとすることは、「砂漠のダチョウ」に近い状態ではないだろうか。

私の身近にもたくさん例がある。例えば、実銃を使っているのに、銃口から実弾が撃ち出されることを全く意識しない訓練である。このような訓練では、殺し合いとなる実際の戦闘場面を意識することなく、武器を武器として使用していない。いざ、『実弾を込めて同じことをしなさい』といわれると、緊張と不安でそれまでやってきたことが何もできなくなる。これでは、いくら訓練をしても実際には役に立たない。逆に、弾が入っていなくても、実弾が装填されているという意識を保ったまま訓練できれば、技術のみならず心が鍛えられる。これによって、実際の戦火の中にあっても、極度の不安からくる心の暴走を管理し、正しい判断と行動ができる能力が養われるのだ。これはまた、銃を竹刀や弓、あるいは木刀に置きかえれば、道場での稽古にも相通じることであろう。

戦いの場で実際に「技」が使えるかどうかは、「不安全」な状況にあっても「安心」を保てるか否かにかかっていると思う。稽古でもよく、肩の力みをとれとか重心を落とせというが、それも本質は心の問題なのだろう。不安があるから相手に接触している部分に力が入り、気持ちが浮いて重心も浮く。自己の不利益や不安全な状態に不安を覚えるから、心が動揺し、やるべきことができなくなる。だから、稽古では、心の緊張感を維持しつつ体には緊張を及ぼさないような「心と体」の鍛練をしなくてはならない。

心の稽古は、道場より日常的場面での修練の方が効果的な場合もあるだろう。身の回りで起きる実際の出来事に対し、自分の正しいと思うことを素直に表わすということは結構難しいものである。お金、物、名誉等はもとより、家族や友人、会社等の人間関係にもことさら執着すると心の安定が乱れる。いろいろなストレスに直面したとき、「生」に執着しても「死」に傾倒してもよくない。自分の真心が欲する「正しいこと」に目を向け、それ以外の物事に執着しないように気をとめながら、物を丁寧に使い、名誉をありがたく受け、家族をいとしみ、人情に触れればいい。「人生の目的として悔いのないもの」に素直に向か

っていける心と体の状態を維持できれば、不安全の中にあっても安心を保つ武士道の本旨に沿った生き方といえるのではないだろうか。生涯かけても完成された武士には辿り着かぬとしても、それに向かって生きたいものである。